

幼児の描画にみられる色彩使用傾向に についての調査

伊 藤 民 子

A Research on the Colors used in Infants' Paintings

by

Tamiko Ito

I は じ め に

今日、私たちをとりまく環境は、建築・家具・衣服のみならず、あらゆる生活用品にカラー・ブ
ランニングがなされ、印刷物やテレビ等のマス・コミからも常に数多くの色彩が流れ込み巷に氾濫
している。

この色の洪水の中で生活する活動的感受性の強い子供たちが、はたしてどのように色を感受し豊
かな色彩の生活を享受し使用しているか興味のある問題である。

発達心理学では一般に幼児の造形活動を乱画期・命名期・図式期と位置づけ重要な造形能力の発
達段階としている。特に3～5歳児に於けるこの期の活動を理解するには、色彩・線・スペース使
用と内面的生活や問題との関係考察が必要であると考えられている。

これらを踏まえ、今回、幼児の描画作品の中^に使用されている色をとりあげ、その使用色にどの
ような傾向がみられるか、調査・検討をした。

II 調査対象及び方法

1. 調 査 対 象

- 新潟青陵幼稚園全園児を対象に、季節差等を考慮し、3歳・4歳・5歳の平常保育における
2年間の全描画作品1,491枚について検討した。
- 期間 1983. 4～1984. 12
(別項) 1985. 1～1985. 2

2. 調 査 方 法

主観的評価法の一方法である順位法を用い、画面中中心となる主題表現に使用されている色及
び輪郭線について上位3色の抽出を行い、年令別・性別・経験画(テーマ画)と自由画に分け、
その中に現れる使用色数・使用頻度の面から調査を行った。

尚、当該幼稚園における園児の内訳及び使用している色材は下記のものである。

表 1 調査の内訳（1～2月の自由画は別項として扱う）

	年 令	性 別	人 数	絵 画 枚 数	
				経験画	自由画
4 ～ 7 月	3 才 児	男 児	18	40	62
		女 児	15	34	50
	4 才 児	男 児	34	95	44
		女 児	20	55	21
	5 才 児	男 児	37	95	19
		女 児	34	95	24
9 ～ 12 月	3 才 児	男 児	18	77	23
		女 児	14	59	20
	4 才 児	男 児	31	31	78
		女 児	17	16	100
	5 才 児	男 児	33	136	52
		女 児	30	94	32
1 ～ 2 月	3 才 児	男 児	14	—	23
		女 児	14	—	17
	4 才 児	男 児	23	—	24
		女 児	23	—	23
	5 才 児	男 児	33	—	33
		女 児	18	—	19

- ・色材：3 歳児 クレパス（12色）
- 4 歳児 クレパス（16色）
水性マーカー（8色）
ポスターカラー（11色）
- 5 歳児 クレパス（16色）
水性マーカー（8色）
水彩絵具（8色）
- ・色相名：白・灰色・黒
赤・桃色・朱色・肌色・茶色・
焦茶・オレンジ色・黄色・山吹色
黄土色・黄緑・緑・青・水色・
藍色・紫
- J I S 標準色票による視感比色では、各色材に色相・明度・彩度とも相当ばらつきが認められたが、今回の調査では同一色として扱った。
- 表中の色名表示は J I S Z-8102
「色名」を基に、基本色名と慣用色名を用いた。

この表から全体の使用色数は5～6色以下がかなり多いが、年令別にみると明らかに3歳児では1～2色使用が圧倒的に多く、4歳児では3色以上を使用する子供が多くなり、5歳児では6～7色以上の使用児が顕著に多くなることがわかる。

春季と秋季で比較すると、各年令とも秋季の方が色使用数は明らかに増加している。特に4歳児・5歳児に10色以上の使用者が相当みうけられることは、成長とともに色感が正常に発達していることを示すものと考えられる。

男児と女児においては、3歳児を除き、女児の方が多くの色を用いて描く傾向がみられる。これは子供の一般的な知的発達の上で女児の方が早い成長のカーブをえがくことからくるものと解釈できる。

経験画と自由画においては、園児の自由意志で描いた自由画よりも、経験・体験に基づいてテーマを定め描いた絵の方に多くの色使いがみられる。これは自由な描画が幼児にとって遊びとされているのに対し、経験画が体験し感動したことへの強い印象・記憶の再現・再体験としてとらえられているからとみられ興味深い。

幼児に使用させる色材については以前から種々検討され、常に子供の心理との力動的な関係を²⁾考慮して与える必要があり、子供の創造力はしばしば材料や技術によって左右されるものであると³⁾されている。従ってその発達段階に応じてそれぞれ適当なものが選ばれ、大体色相全域から12～3色を選び与えているのが普通である。また、一般的に年令が低いほど幼児に与える表現材料の色数は少なくてよいとされているが、持田芳子氏は子供たちにとって同じ所を二度ぬる重色による混色には無理があり、色数の少ない描画材では年少の子供が描きたい内容の色が使えないことになるので、年少児であればあるほど多色の描画材を与える必要があるとしている。⁴⁾

また、渡辺洋子氏は3歳児においては物の見方・感じ方も急激なテンポで成長し、その表現意欲も旺盛で、幼児がすべての物との対決の中で受けとめた感情や、比較の中で読みとった物の色を、既に準備されている12色や16色のクレヨン・パスでは表現できず、むしろ3歳児後半のこの時期にこそ色数の多い描画材(クレヨン・パス25色以上)のものを与えた方が良いといっている。⁵⁾

今回の調査では、3歳児で10色以上使いこなす子供はいなかったが、私も生涯の色彩感覚に大切なこの基礎形成時期に、幼児が多くの色彩を目にしその使用を試み自己をあますことなく表現できるよう適切な表現材料を与えるべきであると考ええる。

2. 使用色頻度

◎ 一画面中3色抽出、上位5色までの表。

表3 経験画・自由画の年齢・性別使用色頻度

()内は作品数に対するその色の出現率である。 単位：％

出現順位			1	2	3	4	5
経験画	3歳	男児	黒 (19.0)	赤 (18.4)	青 (12.5)	緑 (9.8)	肌色 (5.9)
		女児	赤 (17.8)	桃色 (15.7)	黒 (14.8)	オレンジ色 (9.7)	茶色 (9.3)
	4歳	男児	黒 (20.1)	青 (13.4)	赤 (10.9)	緑 (10.6)	水色 (6.1) 茶色 (6.1)
		女児	赤 (21.7)	黒 (13.8)	桃色 (12.8) 緑 (12.8)	オレンジ色 (11.8)	
	5歳	男児	黒 (15.5)	赤 (11.7)	青緑 (10.7) (10.7)	茶色 (9.8)	
		女児	赤 (14.7)	黒 (13.8)	茶色 (10.7)	緑 (8.2)	水色 (7.3)
自由画	3歳	男児	赤 (16.0)	緑 (15.4)	青 (13.3)	黒 (12.2)	茶色 (7.4)
		女児	桃色 (29.0)	赤 (15.6)	青 (14.9)	黒 (9.9)	オレンジ色 (9.2)
	4歳	男児	黒 (21.0)	赤緑 (12.2) (12.2)	水色 (11.6)		黄色 (7.6)
		女児	赤 (21.7)	桃色 (19.9)	黒 (11.2)	黄色 (7.9) 緑 (7.9)	
	5歳	男児	赤 (17.6)	黒 (16.2)	水色 (13.2)	灰肌色 (7.4) (7.4)	
		女児	桃色 (13.8)	赤 (13.2)	黒 (11.4)	水色 (10.2)	灰色 (7.8)

上の表から幼児の使用する色は赤・黒が圧倒的に多いことがわかる。年齢別にみた場合にも各年齢とも赤或いは黒の使用が優位にあげられ、低年齢児では原色の使用が多く成長とともに中間色の使用がみられる。

男児と女児についてみると、男児に赤・黒の使用傾向が強く次に続く色として青系・緑があげられる。女児は赤が多く以下黒も含み桃色・茶色・オレンジ色などの暖色系の使用がみられる。これらは社会や家庭において幼児の衣類・食器・玩具など生活全般に亘って、男児には“男の子色”として寒色系、女児には“女の子色”として暖色系の色を与えていることが関係していると考えられる。

経験画と自由画においては、自由画での女児の桃色使用が目立つ。黒の使用は男女とも自由画より経験画に多くみられ特に男児にその傾向が強い。

経験画に黒が多いのは、体験した事柄をより正確に輪郭線として細部まで詳しく描こうとする姿勢からきているものと推測され、またこの黒については男児は線描き及び輪郭線として形を描くときに最も多く用いており、色として意識して使っているとはあまり思われない。男児が特に

色として使用する場合は、ロボット・大きな乗り物・動物など、強いもの大きいものを描くときに意識して使っているようにみうけられた。これに対し女兒は人物の髪・目或いは動物の目等に日常の固定観念によって反射的に用いているようである。

◎ 一画面中1色抽出したものについて。

同様の方法により、幼児が画面中一番関心を持って使用したと思われる色或いは輪郭線として用いた色1色を抽出しまとめた結果、3色抽出した場合とほぼ同様の順位をえた。

園児全体では黒・赤・青・緑と強い色を主に用いており、年令別にみると低年令児では原色の使用が中心で、発達年令が増すとともに中間色の使用がみられた。黒についてはやはり年令が増すにつれて使用傾向も増え特に男児にその特徴が現れていた。この黒使用の増加については成長とともに輪郭線として多く使う傾向がみられ、これは幼児が事物をより正確に描こうとする意識の発達姿勢からきているものと考えられる。

春季と秋季を比較すると、3・4歳児では上位5位の色味は順位の変化が若干みられるがほぼ同色であるのに対し、5歳児においては上位3色の色味は同色であったが後位の色にかなりのばらつきがみられた。

性別において男児は黒をトップに赤・青・緑・水色、女兒では赤・桃色が主をなしており黒・水色・茶色がこれに続く。

経験画と自由画の差においても、主となる使用色は3色抽出した場合とほぼ同様の結果を得た。

(別 項)

自由画において「好きな色を使って好きなものを描きなさい。」と特に強調して指示を与えて描かせた場合、最も幼児画の特徴が得られるのではないかと考え、1985年1月～2月にかけて実施をした。

この結果、色数では1色のみ、または6～9色を使用している絵がかなり多く、このうち1色使用は3歳児に限られ特に男児にその傾向がみられた。また年令が増すに従い使用色数は確実に増えどの年令をみても女兒の使用数が男児を上回っていた。

色味の傾向としては全体に赤・黒・緑・青・水色などが中心をなしており、男児は黒・赤・水色・緑・青、女兒では赤・桃色・緑・オレンジ色・水色の順となった。

年令別では男児はどの年令でも上位は黒・赤と変わらず以下水色・青・緑の3色となり、女兒はどの年令でもトップに赤がみられ、3歳児は水色・青・桃色・黒、4歳児は桃色・緑・オレンジ色・茶色、5歳児では緑・オレンジ色・茶色・水色とかなり色味のばらつきがみられた。

これらを指示を与えない自由画と比較してみると、特に男児において上位5位の順位は変わっても使う色は固定していた。

幼児が気持ちのおもむくままに自由な発想のもとで描いた絵では、テーマが与えられ決められた時間に描いた絵より、より豊富に色を用いているものと期待していたが、幼児にとって自由な描画は遊びの一部として受け止められている為か、絵としては極めて完成度が低く色彩も貧しいことがわかった。

テーマが与えられた体験画としての描画では、実際に自分の心と身体を通して感じた事物を正確に再現し、描こうという熱心な姿勢がみられ、幼児の成長とともに色彩も好みの色のみにとどまらず多くの関心を払って使っている様子がうかがわれた。

Ⅳ 結 び

幼児の絵画は内容においてその発達年齢に応じた表現でなされているが、今回の調査により色彩の面からみても同様の結果が認められた。

3歳児は自己の感情のおもむくままにごく限られた色を使い、成長するに伴い次第に豊かに色彩を用いることが出来るようになる。しかし、幼児に共通してみられることは、どの場合でも赤・黒・緑・青と刺激の強い色の使用頻度が高く、中間色等の弱い色は年長になってから加わるようである。

幼児の絵画に用いられる色はしばしば個人的な好み・生理・感情・心理状態を反映しているが、一般に識別しやすい強い色彩を使う傾向にあることは色覚の発達と関係があると思われる。

今回の調査で最も興味深い点は、男児画と女児画の差であった。一般に女児が早熟であるという面を考慮するにしても、幼児の絵画は男女の性差により様々な点で異なっており、モチーフ、表現方法、構図、色彩の点で特に大きな差が認められた。これらの相違を単に成長の差や個人的好み或いは幼児特有の観念としてだけでとらえてよいものかどうか疑問である。

男児の絵画は強いもの・大きいもの・動くもの（乗り物・ロボット・TVの人気漫画のヒーロー等その時代の新しいもの）をモチーフに常に自己の外側からの情報にテーマを求めており、その表現方法も事物に対してリアリティや正確さを追及し興味ある対象を画面に強調して描く姿勢が特にみられた。このようなことが男児の色数使用の少なさを招き、また“勝つパワー”“強いパワー”への憧れが黒・赤及び緑・青などの寒色系使用の結果を生むことにもなったのであろう。

それに対し女児はいつの時代においても自己を中心に人や花を描き、輝く太陽のもとでの美しく優しく暖かい“平和の楽園”を絵そらごととして画面いっぱいに描き続けている。これは女児のモチーフが男児のように外側からの情報からではなく、内側からの動かないイメージからくるものであると考えられる。女児のこのような指向は生命を生み育てる性として時代をこえ永遠のテーマとして持ち続けられ、画面いっぱいに理想の世界を多彩な色を使って表す結果になったものと思われる。

色彩使用における男女の差も単に色に関心がある・なしの理由や“男の子色”“女の子色”という日常的観念によることだけにとどまらず、男女の本来的な性差の資質を強く反映しているのではないかと思われた。

子供は見たものを描かず知っているものを描くといわれている。今回の調査では画面中の色数と色味の傾向について調べたが、幼児の絵は環境の違い等によっても様々な変化をみせており、他園との比較や時代による変化を考察するにはまだ資料が不十分であるので、それは今後の調査検討としたい。

この調査にご協力を頂いた新潟青陵幼稚園の先生方、まとめるにあたりご指導頂いた諸橋新教授に深く感謝いたします。

引用文献・注

- 1) 「美術教育講座 絵画・彫塑編」(室 靖 分担執筆)金子書房(1955) p. 55
- 2) 前掲書, p. 55
- 3) 前掲書, p. 164
- 4) 「描画のための色彩指導」(持田芳子 分担執筆)黎明書房(1978) p. 75
- 5) 前掲書, (渡辺洋子 分担執筆) p. 73

参 考 資 料

- 霜田静志著 「児童画の心理と教育」金子書房（1966）
- 松岡武著 「色彩とパーソナリティ」金子書房（1983）
- 皆本二三江編著 「0歳児からの絵画製作・造形」文化書房博文社（1984）
- 太田昭雄・多田信作著 芸術教育社編 「描画のための色彩指導」黎明書房（1978）
- 文部省 「幼児教育指導書・領域編・絵画製作」学習研究社（1969）
- 新潟市私立幼稚園研究部・絵画製作部会 「幼児画の指導」小出印刷所（1977）